
月刊宇宙人

牛方巴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月刊宇宙人

【Zコード】

N3214BA

【作者名】

牛方巴

【あらすじ】

「月刊宇宙人」という雑誌がある。

それを読む人は、みんなからつけられたキャラクターと自分の本物の姿とが食い違っている者たちだった。

月刊宇宙人を読み、変身を試みる人々を書いたもの。

一人につき二話完結

俺は、ちょっと変身してみたかった。

昔から真面目キャラで、それが本当の俺と食い違つていて、たまにジョークなんか飛ばすとスゲーひかれた。だから、変わつてみたかった。

「月刊宇宙人」っていう雑誌を、俺は定期購読している。

俺は本当は変人だ。本とかよく読んでいるから真面目キャラと思われがちだけど、あれは全部表紙を付け替えたSF小説。変人と思われたくないで、そうやって読んでいた。

クラスメイトが、「お前、実は変人なんじゃね?」とか言つていた。

「違うよ、そんなことないよ」って言つておいたけど、図星だった。

いつそのこと変わつてみようかと思つた。

「月刊宇宙人七月号」が届いた。表紙を見て俺は息をのんだ。

【真面目君は変人になれる! ? 宇津谷博士の大実験! !】

宇津谷博士は、月刊宇宙人のお抱えみたいな人だ。その博士が、変人キャラに変身できるというマシーンを開発したらしい。

俺は、変身を決意した。

俺は、宇津谷博士のところへ行くことにした。

月刊宇宙人に載っていた宇津谷博士の住所を書き留め、よく晴れた日曜日の朝、宇津谷博士のもとへ向かった。

こういうのって、普通はアポとか取らなきゃいけないんだろうけど、そんなのどうでもよくて、とにかく変身したくて、ためていた三万円を握りしめて、【吟遊詩人通り】に行つた。

宇津谷博士の自宅は、すぐみつかった。紫色の屋根に、黄色の壁。ポストはグロテスクな縁で、芝生は真っピンクだった。形も見たことがないようなもので、模図かずおを抜いていた。

そして、なぜかここだけ人通りが少なかつた。

インターほんを押すと、見たことのある顔がひょこっと出てきた。
「あら、お客様。いらっしゃい。月刊宇宙人の読者だね。君は変人になりたいのか。なるほど、まあ、上がんなさい」

宇津谷博士は、俺の言葉も聞かぬまま中へ入つてしまつた。俺は立ちすくんでしまつた。

「早く来なさいって。変わりたいんだろ？ 顔に書いてありますよ」

確かに宇津谷博士は変人だつた。

家の中は真っ青で、機械とかパソコンとかよくわからないものとかがずらつとあって、書類があちこちに散らばつていた。

その奥に、雑誌に載っていた機械があつた。

「おー、あーつおかしこんだよ。今まで真面目だったのに何言つてこだこつ

「ねえ、聞いてよ。俺さ、忍者が化けた猫に後をつけられてこるんだよ。まんじだよ、言じるよ

麻木海斗 2 (後書き)

麻木海斗編、終わりました。

次回の予定

生野拓登

「おい、拓登。金貸してくれよ」

「ああ、いいよ」

「あ、俺にも！」

「ああ、わかつたよ」

「「サンキュー」、拓登！必ず返すわ」

そういうつて返してくれた人は一人もいない。

僕はお人好しで知られている。お人好しだから引き受ける。お人好しだから代理で怒られる。お人好しだから使われる。お人好しだから金も貸す。そして、お人好しだから返されなくて怒れない。

お人好し。それが、僕の存在意義なのかもしない。

お人好しじゃなかつたら、僕は影にかすんでいただらう。皆と親しくなれなかつたろう。前はお人好しであることがいいことだと思っていた。

でも、最近、そつは思えなくなつた。

物を運んでいる間。怒られている間。僕は、自分が何をしているのかわからなくなる。

これが仲いいつてことなのか？違うだらう。僕は自問自答する。

それで、次は貸さないぞつて思つても、やつぱり貸してしまつお人好しだつた。

僕は「月刊宇宙人」を定期購読している。

SFとか好きで、そのせいでいじめられていた。今は隠している

けど、ばらしたらまたいじめられるだろう。

変わりなくて、強くなりたくて 月刊宇宙人を読んでいるとちょっと強くなれる気がする。

今月の月刊宇宙人に、とんでもないことが書いてあつた。

「宇津谷博士の大成功 強くなりたい君へ」

思わず月刊宇宙人を握りしめてしまつた。

僕は、扉の前に立っていた。

吟遊詩人通り九番地の宇津谷博信の家の扉の前に……

クシャクシャになってしまった「月刊宇宙人」には、宇津谷博士の実験結果と、住所が書かれていた。結果は、成功。喧嘩九連敗の人が、「女帝」と呼ばれる喧嘩最強クイーンに勝つたらしい。

これで僕も変われる。そう思って、宇津谷博士の家に向かった。博士の家は、なんというか、【まことちゃん】を書いた人の家に似ていた。

形は全然違うけど、発想は同じだと思った。

扉は、金色だった。迫力がすごかった。

と、後ろから肩をたたかれた。振り返ると、月刊宇宙人に載っていた顔があった。

「やあ、君。強くなりたいかね。なりたいんだね。入りなさい。強くなれるよ」

あっけにとられている僕の腕を引っ張つて、宇津谷博士は家の中に入つていった。もう片方の手には大根が握られていた。

書類が散らばっている部屋をよく見ないうちに、黄色い扉の中に入れられた。

指差された椅子に座ると、上から何かが降ってきた。

「拓登、金貸してくれよ」

「いいよ。でも、利子50パーで返してね

「りょーかい！」

「もし返してくれなかつたら

「ハベハ（・・・）

「ハハだから

生野拓登 2 (後書き)

生野拓登編、終わりました

次 橋本真依子

あんたは宇宙人を信じるかい？

SFに乗つているらしくて、でかい目をしたガリガリの丸坊主で、今でもいい大人たちがいるかいないかで議論しているあれ。

信じている人もいるだろう。でも、あたしは信じない。昔は信じていたけどね。

それもこれも、全部父ちゃんのせいなんだ。

あたしの両親は、あたしがまだ幼いころに離婚したんだ。あたしは母ちゃんに育てられてきた。

でも、どつちかつていうと父ちゃんの方が気が合つて、よく映画とか見に行つた。その父ちゃんが、すつじいSFマニアだったんだ。それで、あたしもSF好きになつた。

でも、父ちゃんは女を作つて出て行つた。母ちゃんとはやつていけないつて。すごいショックだった

。そつからあたしはSF嫌いになつた。

今は、SFとは腐れ縁だ。

中学からの友達に、瀬尾香里奈つてのがいる。そいつが、やっぱSFマニアだった……

ある日、香里奈が雑誌を読んでいた。

「よお、香里奈。何読んだんの

「ああ、真依子、おはよう。これね、定期購読限定で、書店とかそういうところには売つてないんだ

香里奈には、無駄なことだけ先に話すつていう癖がある。

「で、なんていう雑誌なのぞ。それを先に行つてよね」

「ああ、名前？これは、月刊宇宙人っていうんだ」

腐れ縁つてのは、どこまでも切れないから腐れ縁なんだ。
やつぱりあたしとUFOは切つても切れない縁らしい。

数日後

あたしは、珍しく大型書店にいた。

もちろんSFは嫌いだけど、題名にちょっとと引かれた。

最初は香里奈の言うことなんか信じていなくて、コンビニの雑誌欄を見ていた。

でも、なかつたから、書店を回ってみた。

それだから、今あたしは紀伊國屋にいる。

一時間探し回つても「月刊宇宙人」つつうのはなくて、しょうがないからちよつとかつこいい店員に尋ねることにした。

「ああ、すま…じゃねえ、すいません。月刊宇宙人つつう雑誌つて、ない？」

店員は顔をしかめて、「それって、インターネットだけで取り扱われているんですよ。だから、パソコンで調べてください」と言ってあたしを追い払った。

ネームプレートには【麻木海斗】って書いてあった。よし、こいつ三代まで呪つてやる。

最悪なことにあたしはパソコンを持っていない。ネットカフェに入るのはプライドに反するから、月刊宇宙人はあたしの心の中に留めておくだけにした。

来年からは就活が始まる。SFとの縁は続くかもしないけど、しょうがないかもしない。

気付けば紀伊國屋に来てから一時間たつていた。
SFのためにここまでやつたのは初めてだ。

電車で来たので駅へ向かつた。

駅員のじじいの顔が、誰かに似ていた。

じじいがあたしを見た。そして、顎が落ちた。
あたしの顎も落ちてしまった。

橋本真依子 2(後書き)

橋本真依子編、終わりました。

次回作で終了です

次回 滝本信彦

滝本信彦 1 (前書き)

この「滝本信彦編」で、月刊宇宙人を終わらせようと思っています。
滝本信彦は、月刊宇宙人の編集者です。

大晦日の除夜の鐘は、百八回なるらしい。除夜の鐘をききながら、今年最後の百八つの記事を書き上げるのも、これが最後だ。

俺は、月刊宇宙人という雑誌の編集者だ。

月刊宇宙人は、ザ・スペースコープレーションが発行する雑誌で、インターネット販売のみとなっている。取り上げる題材があれなので、読者も少ないのではと思っていたら、全国にまんべんなく読者がいて、全員を合計すれば東京都民と大阪府民を足しても越せないほどだった。

もともと俺は別の会社にいた。そこで【ねつ造写真の実態をつかむ】とかなんとかいう企画を行つことになつて、ほかの会社に忍び込む役割が俺になった。

俺が目をつけたのが「ザ・スペースコープレーション」。いかにも怪しいから、潜入取材を行うことにした。

しかし、スペコボ（みんながそう呼んでる）では、UFOの写真とかいうものを載せたりはしなかつた。というか、中身が魅力的で、雰囲気が自然で、俺は前の会社を辞めてスペコボに入った。

UFOでは、宇宙人がいたらどんなものなのかとか、宇津谷博士という人の実験結果を載せたりだと、その他科学的いろいろを書くだけで、偽物のことは何一つ書かなかつた。

おれは、月刊宇宙人で毎年九十六個の記事を書くのを任せられた。一回の雑誌で八つの記事。そう簡単ではないけれど、やっぱり面

白かった。

あるとき、小説担当の人（なぜか小説は自分たちで書くものだった）が定年退職した—（なぜか小説は自分たちで書くものだった）。

次の小説担当に俺は名乗り出た。一瞬で決まり、九十六個が百八個に変わった。

その俺がなぜ今年で仕事が終わってしまうのかって？

有名な某出版社から連絡が来て、小説家への道が開けたからさ。

今回は、3つに増えるかもしません。

「お前が書いた小説が評価されたってよ。で、ちんけな仕事やってないで小説書いてみないかって、兄貴が言つてたぜ。どうだ、やってみないか」

銀髪オールバックを撫でつけながら、編集長がそういうつたのは、あと一ヶ月で年が変わるって時だった。

編集長のお兄さんは、某出版社に所属している。そのお兄さんが俺の小説を読んで、声をかけたらしい。

「で、でも、俺、まだここで仕事したいし、それに、小説なんて……」

「あのよ、お前よ、^{おめえ} 小説家を目指してたんだってな。いいじゃねえか。やつてみろよ。お前ならできるはずだぜ」

20

図星だった。

俺は幼いころから文学少年だった。将来の夢は小説家で、新人賞に応募して最終候補まで行つたこともある。

それでも夢破れて、スペコボにいる。

「まあ、すぐになれとは言わねえけどよ。年越しまでにお前の返事を聞きてえな」

そう言つと、編集長は扉を指差した。俺は軽く頭を下げて家路についた。

ふかふかのソファに寝そべっている間も、俺の頭はこんがらがっていた。

小説家への道が見えたのはうれしかった。でも、やはつこいで仕

事をしてみたい願望もあつた。

もし、ここで小説家をあきらめたらどうなるだらう。

六十過ぎまで月刊宇宙人で仕事して、まあまあの給料もらつて、
田舎で老後を過ごす。

悪くないけれど、俺の名前が後世に残るわけではない。

結局、十一月も後半になるまで、答えは出なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3214ba/>

月刊宇宙人

2012年1月8日19時54分発行